

三つの窓

芥川龍之介

青空文庫

1
鼠

一等戦闘艦××の横須賀軍港^{よこすか}へはいったのは六月にはいったばかりだった。軍港を囲んだ山々はどれも皆雨のために煙っていた。元来軍艦は碇泊^{ていはく}したが最後、鼠^{ねずみ}の殖^ふえなかつたと云うためしはない。——××もまた同じことだった。長^{なが}雨^{あめ}の中に旗^{はた}を垂^たらした二万噸^{トシ}の××の甲板^{かんぱん}の下にも鼠はいつか手箱^{てのび}だの衣囊^{いのう}だのにもつきはじめた。

こう云う鼠を狩^{とら}るために鼠を一匹^{ひとひき}捉えたものには一日の上陸を許すと云う副長の命令の下つたのは碇泊後三日^{みっか}にならない頃だった。勿論水兵や機関兵はこの命令の下つた時から熱心に鼠狩^{ねずみか}りにとりかかった。鼠は彼等の力のために見る見る数^{かず}を減^へらして行^ゆった。従つて彼等は一匹の鼠も争^あわな^いい^わない^け訣^けには行^ゆかなか^つた。

「この頃みんなの持つて来る鼠は大抵^{たいてい}八つ裂^さきになつてゐるぜ。寄つてたかつて引っぱり合うものだから。」

ガールウムに集つた将校たちはこんなことを話して笑つたりした。少年らしい顔をしたA中尉もやはり彼等の一人だった。つゆ空に近い人生はのんびりと育つたA中尉にはほん

「おい、輸入^{ゆにゆう}か？」

「うん、輸入だ。」

彼等の問答はA中尉の耳にはいらずにはいなかった。彼はSを呼び戻し、甲板の上に立たせたまま、彼等の問答の意味を尋ね出した。

「輸入とは何か？」

Sはちゃんと直立し、A中尉の顔を見ていたものの、明らかにしよげ切っているらしかった。

「輸入とは外^{そと}から持つて来たものであります。」

「何のために外から持つて来たか？」

A中尉は勿論何のために持つて来たかを承知していた。が、Sの返事をしないのを見ると、急に彼に忌^{いまいま}々しさを感じ、力一ぱい彼の頬^{ほお}を擲^{なぐ}りつけた。Sはちよつとよろめいたものの、すぐにまた不動の姿勢をした。

「誰が外から持つて来たか？」

Sはまた何とも答えなかった。A中尉は彼を見つめながら、もう一度彼の横顔を張りつける場合を想像していた。

「誰だ？」

「わたくしの家内かないであります。」

「面会に来たときに持つて来たのか？」

「はい。」

A 中尉は何か心の中に微笑しずにはいらなかった。

「何に入れて持つて来たか？」

「菓子折に入れて持つて来ました。」

「お前の家うちはどこにあるのか？」

「平坂下ひらさかしたであります。」

「お前の親は達者たつしやでいるか？」

「いえ、家内と二人暮らしであります。」

「子供はないのか？」

「はい。」

S はこう云う問答の中も不安らしい容子ようすを改めなかった。A 中尉は彼を立たせて措おいたまま、ちよつと横須賀よこすかの町へ目を移した。横須賀の町は山々の中にもごみごみと屋根を積

み上げていた。それは日の光を浴びていたものの、妙に見すばらしい景色けしきだった。

「お前の上陸は許可しないぞ。」

「はい。」

SはA中尉の黙っているのを見、どうしようかと迷っているらしかった。が、A中尉は次に命令する言葉を心の中に用意していた。が、しばらく何も言わずに甲板かんばんの上を歩いていた。「こいつは罰を受けるのを恐れている。」——そんな気もあらゆる上官のようにA中尉には愉快でないことはなかった。

「もう善いい。あっちへ行けゆけ。」

A中尉はやつとこう言った。Sは挙手の礼をした後のち、くると彼に後ろうしを向け、ハツチの方へ歩いて行こうとした。彼は微笑びしょうしないように努力しながら、Sの五六歩隔へだたった後のち、俄にわかにまた「おい待て」と声をかけた。

「はい。」

Sは咄嗟にふり返った。が、不安はもう一度体からだ中じゅうに漲みなぎって来たらしかった。

「お前に言いつける用がある。ひらさかした平坂下にはクラツカアを売っている店があるな？」

「はい。」

「あのクラツカアを一袋買つて来い。」

「今でありますか？」

「そうだ。今すぐに。」

A 中尉は日に焼けたSの頬ほおに涙の流れるのを見のがさなかった。――

それから二三日たった後のち、A 中尉はガールウムのテエブルに女名前の手紙に目を通していた。手紙は桃色の書簡箋しょかんせんに覚束おぼつかないペンの字を並べたものだ。彼は一通り読んでしまうと、一本の巻煙草に火をつけながら、ちょうど前にいたY 中尉にこの手紙を投げ渡した。

「何だ、これは？ …… 『昨日さくじつのことは夫の罪にては無これなく之、皆浅はかなるわたくしの心より起りしこと故、何とぞ不あしからず悪御ゆるし下され度候なをうろう。 …… なおまた御志おこころざしのほどは後のちまでも忘れまじく』 ……」

Y 中尉は手紙を持ったまま、だんだん輕蔑けいべつの色を浮べ出した。それから無愛想ぶあいそうにA 中尉の顔を見、冷ひやかすように話しかけた。

「善根ぜんこんを積んだと云う気がするだろう？」

「ふん、多少しないこともない。」

A 中尉は軽がると受け流したまま、円窓まるまどの外を眺めていた。円窓の外に見えるのは雨あしの長い海ばかりだった。しかし彼はしばらくすると、俄にわかに何かに羞はじるようにこう Y 中尉に声をかけた。

「けれども妙に寂しいんだがね。あいつのビンタを張った時には可哀そうだとも何なんとも思わなかった癖に。……」

Y 中尉はちよつと疑惑とも躊躇ちゆうちよともつかない表情を示した。それから何とも返事をしずにテエブルの上の新聞を読みはじめた。ガングルウムの中には二人ふたりのほかにちようど誰もい合わせなかった。が、テエブルの上のコップにはセロリイが何本もさしてあつた。A 中尉もこの水々しいセロリイの葉を眺めたまま、やはり巻煙草ばかりふかしていた。こう云う素そつ気ない Y 中尉に不思議にも親しみを感じながら。……

2 三人

一等戦闘艦××はある海戦を終つた後のち、五隻の軍艦を従えながら、静かに鎮海灣ちんかいわんへ向つて行つた。海はいつか夜よるになつていた。が、左舷さげんの水平線の上には大きい鎌かまなりの月が

一つ赤あかと空にかかっていた。二万噸^トの××の中は勿論まだ落ち着かなかつた。しかしそれは勝利の後^{あと}だけに活き活きとしていることは確かだった。ただ小心^{しょうしん}者のK中尉だけはこう云う中にも疲れ切つた顔をしながら、何か用を見つけてはわざとそこを歩きまわっていた。

この海戦の始まる前夜、彼は甲板^{かんばん}を歩いているうちにかなかな角燈^{かくとう}の光を見つけ、そつとそこへ歩いて行つた。するとそこには年の若い軍楽隊^{ぐんがくたい}の楽手^{がくしゅ}が一人甲板の上に腹ばいになり、敵の目を避けた角燈の光に聖書を読んでいるのであつた。K中尉は何か感動し、この楽手に優しい言葉をかけた。楽手はちよいと驚いたらしかつた。が、相手の上官^{こく}の小言^{ここと}を言わないことを発見すると、たちまち女らしい微笑を浮かべ、怯^おず怯^おず彼の言葉に答え出した。……しかしその若い楽手ももう今ではメエン・マストの根もとに中^{あた}つた砲弾のために死骸^{しかい}になつて横になつていた。K中尉は彼の死骸を見た時、俄^{にわ}かに「死は人をして静かならしむ」と云う文章を思い出した。もしK中尉自身も砲弾のために咄嗟^{とつさい}に命を失つていたとすれば、——それは彼にはどう云う死よりも幸福のように思われるのだつた。

けれどもこの海戦の前の出来事は感じ易いK中尉の心に未^{いま}だにはつきり残っていた。戦

闘準備を整えた一等戦闘艦××はやはり五隻の軍艦を従え、浪の高い海を進んで行った。
 すると右舷の大砲が一門なぜか蓋を開かなかった。しかももう水平線には敵の艦隊の挙げ
 る煙も幾すじかかすかにたなびいていた。この手ぬかりを見た水兵たちの一人は砲身の上
 へ跨るが早いか、身軽に砲口まで腹這って行き、両足で蓋を押しあげようとした。しかし
 蓋をあけることは存外容易には出来ないらしかった。水兵は海を下にしたまま、何度も
 両足をあぐくようにしていた。が、時々顔を挙げては白い歯を見せて笑ったりもしていた。
 そのうちに××は大うねりに進路を右へ曲げはじめた。同時にまた海は右舷全体へ凄まじ
 い浪を浴びせかけた。それは勿論あつと言う間に大砲に跨った水兵の姿をさらってしま
 うのに足るものだった。海の中に落ちた水兵は一生懸命に片手を挙げ、何かおお声に叫んで
 いた。ブイは水兵たちの罵る声と一しよに海の上へ飛んで行った。しかし勿論××は敵の
 艦隊を前にした以上、ボオトをおろす訣には行かなかった。水兵はブイにとりついたもの
 の、見る見る遠ざかるばかりだった。彼の運命は遅かれ早かれ溺死するのに定まっていた。
 のみならず艦はこの海にも決して少いとは言われなかった。……

若い楽手の戦死に対するK中尉の心もちはこの海戦の前の出来事の記憶と対照を作ら
 ずにいる訣はなかった。彼は兵学校へはいったものの、いつか一度は自然主義の作家にな

ることを空想していた。のみならず兵学校を卒業してからもモオパスサンの小説などを愛読していた。人生はこう云うK中尉には薄暗い一面を示し勝ちだった。彼は××に乗り組んだ後、エジプトの石棺せつかんに書いてあった「人生——戦闘せんとう」と云う言葉を思い出し、××の将校や下士卒は勿論、××そのものこそ言葉通りにエジプト人の格言を鋼鉄に組み上げていていると思ったりした。従つて楽手の死骸の前には何かあらゆる戦いを終つた静かさを感ぜずにはいられなかつた。しかしあの水兵のようにどこまでも生きようとする苦しさもたまらないと思わずにはいられなかつた。

K中尉は額ひたいの汗を拭きながら、せめては風にでも吹かれるために後部甲板こうぶかんばんのハッチを登つて行つた。すると十二吋インチの砲塔ほうとうの前に綺麗きれいに顔を刺そつた甲板士官かんばんしかんが一人両手ひとりを後ろに組んだまま、ぶらぶら甲板を歩いてゐた。そのまた前には下士かしが一人頬骨ほおぼねの高い顔を半ば俯うつむ向け、砲塔を後ろに直立していた。K中尉はちよつと不快になり、そわそわ甲板士官の側へ歩み寄つた。

「どうしたんだ？」

「何、副長の点検前に便所へはいつていたもんだから。」

それは勿論軍艦の中では余り珍らしくない出来事だった。K中尉はそこに腰をおろし、

スタンションを取り払った左舷さげんの海や赤い鎌かなりの月を眺め出した。あたりは甲板士官の靴くつの音のほかに人声も何も聞えなかった。K中尉は幾分か気安さを感じ、やっときょうの海戦中の心もちなどを思い出していた。

「もう一度わたくしはお願い致します。善行賞ぜんこうしょうはお取り上げになっても仕かたはありません。」

下士かしは俄わかに顔を挙げ、こう甲板士官に話しかけた。K中尉は思わず彼を見上げ、薄暗い彼の顔の上に何か真剣な表情を感じた。しかし快活な甲板士官はやはり両手を組んだまま、静かに甲板を歩きつづけていた。

「莫迦ばかなことを言うな。」

「けれどもここに起立してはわたくしの部下に顔も合わされません。進級の遅れるのも覚悟しております。」

「進級の遅れるのは一大事だ。それよりそこに起立している。」

甲板士官はこう言った後のち、気軽にまた甲板を歩きはじめた。K中尉も理智的には甲板士官に同意見だった。のみならずこの下士の名誉心を感じ傷的と思う気もちもない訣わけではなかった。が、じつと頭を垂たれた下士は妙にK中尉を不安にした。

「ここに起立しているのは恥辱ちじよくであります。」

下士は低い声に頼みつづけた。

「それはお前の招いたことだ。」

「罰は甘んじて受けるつもりであります。ただどうか起立していることは」

「ただ恥辱と云う立てまえから見れば、どちらも畢ひつきよう竟同じことじゃないか？」

「しかし部下に威厳を失うのはわたくしとしては苦しいのであります。」

甲板士官は何とも答えなかった。下士は、——下士もあきらめたと見え、「あります」

に力を入れたぎり、一言ひとことも言わずに佇たたずんでいた。K中尉はだんだん不安になり、（しか

もまた一面にはこの下士の感傷主義に欺だまされまいと云う気もない訣わけではなかった。）何か

彼のために言つてやりたいのを感じた。しかしその「何か」も口を出した時には特色のない

言葉に變つていた。

「静かだな。」

「うん。」

甲板士官はこう答えたなり、今度は願あこをなでて歩いていった。海戦の前夜にK中尉に「昔、
木村重成きむらしげなりは……」などと言ひ、特に叮嚀ていねいに刺そつていた願あこを。……

この下士は罰をすました後、いつか行方不明になつてしまった。が、投身することは勿論、直のある限りは絶対に出来ないのに違いなかった。のみならず自殺の行われ易い石炭庫の中にもいないことは半日とたたないうちに明かになつた。しかし彼の行方不明になつたことは確かに彼の死んだことだつた。彼は母や弟にそれぞれ遺書を残していた。彼に罰を加えた甲板士官は誰の目にも落ち着かなかつた。K中尉は小心ものだけに人一倍彼に同情し、K中尉自身の飲まない麦酒を何杯も強いずにはいられなかつた。が、同時にまた相手の酔うことを心配しずにもいられなかつた。

「何しろあいつは意地つぱりだつたからなあ。しかし死ななくつても善いじゃないか？——」

相手は椅子からずり落ちかかつたなり、何度もこんな愚痴を繰り返していた。

「おれはただ立つていろと言つただけなんだ。それを何も死ななくつたつて、……」

××の鎮海湾へ碇泊した後、煙突の掃除にはいつた機関兵は偶然この下士を発見した。彼は煙突の中に垂れた一すじの鎖に縊死していた。が、彼の水兵服は勿論、皮や肉も焼け落ちたために下つてゐるのは骸骨だけだつた。こう云う話はガングルウムにいたK中尉にも伝わらない訣はなかつた。彼はこの下士の砲塔の前に佇んでいた姿を思い出し、

まだどこかに赤い月の鎌なりにかかっているように感じた。

この三人の死はK中尉の心にもいつまでも暗い影を投げていた。彼はいつか彼等の中に人生全体さえ感じ出した。しかし年月ねんげつはこの厭世えんせい主義者をいつか部内でも評判の善い海軍少将の一人に数えはじめた。彼は揮毫きこうを勧められても、滅多めったに筆をとり上げたことはなかった。が、やむを得ない場合だけは必ず画帖がじょうなどにこう書いていた。

君看双眼色きみみよそうがんのいろ

不語似無愁かたらざればうれいなきになたり

3 一等戦闘艦××

一等戦闘艦××は横須賀軍港よこすかのドックにはいることになった。修繕工事しゅうぜんこうじは容易に捗はかどらなかつた。二万噸トシの××は高い両舷りょうげんの内外に無数の職工をたからせたまま、何度もいつにない苛立いらだたしさを感じた。が、海に浮かんでいることも蠅かきにとりつかれることを思えば、むず痒いがゆ気もするのに違いなかつた。

横須賀軍港には××の友だちの△△も碇泊ていはくしていた。一万二千噸の△△は××よりも

年の若い軍艦だった。彼等は広い海越しに時々声のない話をした。△△は××の年齢には勿論、造船技師の手落ちから舵かじの狂い易いことに同情していた。が、××を勉いたむるために一度もそんな問題を話し合つたことはなかった。のみならず何度も海戦をして来た××に対する尊敬のためにいつも敬語を用いていた。

するとある曇つた午後、△△は火薬庫に火のはいったために俄にわかに恐しい爆声を挙げ、半ば海中に横になつてしまった。××は勿論びっくりした。(もつとも大勢おおぜいの職工たちはこの××の震ふるえたのを物理的に解釈したのに違いなかった。)海戦もしない△△の急に片輪かたわになつてしまふ、——それは実際××にはほとんど信じられないくらいだった。彼は努めて驚きを隠し、はるかに△△を励したりした。が、△△は傾いたまま、炎や煙ほのおの立ち昇のぼる中にただ唸うなり声を立てるだけだった。

それから三四日たつた後のち、二万噸の××は両舷の水圧を失つていたためにだんだん甲板かんぱも乾割ひわれはじめた。この容子ようすを見た職工たちはいよいよ修繕工事を急ぎ出した。が、××はいつの間にか彼自身を見離していた。△△はまだ年も若いのに目の前の海に沈んでしまった。こう云う△△の運命を思えば、彼の生涯は少くとも喜びや苦しみを嘗なめ尽していた。××はもう昔になつたある海戦の時を思い出した。それは旗もずたずたに裂さければ、

マストさえ折れてしまう海戦だった。……

二万噸の××は白じらと乾いたドックの中に高だかと艦首を擡^{もた}げていた。彼の前には巡洋艦や駆逐艇が何隻も出^{しゅつにゆう}入していた。それから新しい潜航艇や水上飛行機も見えないことはなかった。しかしそれ等は××には果^はなさを感^{かん}じさせるばかりだった。××は照つたり曇つたりする横須賀軍港を見渡したまま、じつと彼の運命を待ちつづけていた。その間^{あいだ}もやはりおのずから甲板のじりじり反^そり返^{かへ}つて来るのに幾分か不安を感じながら。：

（昭和二年六月十日）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～11月刊行

入力：j.utyama

校正：多羅尾伴内

2004年1月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三つの窓

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>